

—国内動向—

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和7年10月)

【ポイント】

- 気温は、西日本と沖縄・奄美でかなり高く、降水量は、東日本日本海側と沖縄・奄美で多かった。日照時間は、東日本太平洋側でかなり少なく、沖縄・奄美でかなり多かった。
- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万1755トン、前年同月比95.2%、価格は1キログラム当たり290円、同95.7%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万9015トン、前年同月比94.9%、価格は1キログラム当たり270円、同99.6%となった。
- 2025年は、台風の襲来が少なく、現状では生産が安定しているため、12月の価格は大きく崩れることなく、しっかりした展開が予想される。

(1) 気象概況

上旬の旬平均気温は、暖かい空気に覆われやすく、低気圧や前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだ日もあったため、全国的にかなり高かった。旬平均気温平年差は、北日本で+2.2度、西日本で+3.0度、沖縄・奄美で+2.9度となり、1946年の統計開始以降10月上旬として、沖縄・奄美では1位、北・西日本では1位タイの高温となった。旬降水量は、西日本で3日から4日にかけて本州付近を通過した低気圧や前線の影響で大雨となった所があり、3日には長崎県の厳原で日降水量278.0ミリメートルを観測し10月の極値を記録した。また、9日には、本州の南岸を通過した台風第22号の影響により、伊豆諸島では暴風や大雨となった所があり、伊豆諸島南部では線状降水帯が発生した。旬間日照時間は、北日本日本海側でかなり多かった。沖縄・奄美では平年比160%と1961年の統計開始以降10月上旬として1位の多照となった。

中旬の旬平均気温は、旬平均気温平年差が西日本で+4.6度、沖縄・奄美で+2.8度となり、1946年の統計開始以降10月中旬として1位の高温となった。12日には、鹿児島県の肝付前田で、観測史上最も遅い猛暑日を観測した。旬降水量は、北日本と東・西日本の日本海側で低気

圧や停滞前線、湿った空気の影響を受けやすく多かった。13日には、台風第23号の影響を受けた伊豆諸島で大雨となった。沖縄・奄美では、旬の終わりに湿った空気の影響を受け多かった。旬間日照時間は、北日本太平洋側と東日本日本海側でかなり少なく、北・西日本日本海側と東・西日本太平洋側で少なかった。沖縄・奄美は、高気圧に覆われて晴れた日が多くかなり多かった。

下旬の旬平均気温は、寒気の影響を受け、特に晴れの日が少なかった北・東日本でかなり低かった。一方、停滞前線の南側にあつて、暖かい空気に覆われやすかった沖縄・奄美ではかなり高かった。旬降水量は、前半は強いシベリア高気圧が西日本付近まで張り出すとともに、日本の南には前線が停滞し、期間後半は、低気圧と高気圧が交互に日本付近を通過した。低気圧通過後には、北日本に寒気が流れ込んだ。このため、全国的に曇りや雨の日が多かった。沖縄・奄美は、熱帯低気圧や湿った空気、停滞前線の影響を受けて旬降水量がかなり多かった。旬間日照時間は全国的に少ない所が多く、北日本日本海側と沖縄・奄美ではかなり少なかった。特に沖縄・奄美では、平年比が43%で、1961年の統計開始以降、10月下旬として最も少なかった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本						日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側
東日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側
西日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側			

資料: 気象庁「10月の天候」

1 平年を上回る水準			
2 平年並み			
3 平年を下回る水準			

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、
入荷量は11万1755トン、前年同月比95.2%、

価格は1キログラム当たり290円、同95.7%
となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向 (10月速報)

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	111,755	95.2	89.5	290	95.7	111.3	318	287	267
だいこん	9,900	98.6	92.1	107	89.8	99.9	136	102	92
にんじん	7,243	87.8	88.8	151	131.5	110.7	143	150	160
はくさい	13,704	104.5	90.0	84	79.7	101.3	112	81	69
キャベツ類	15,610	98.0	93.9	89	69.4	92.5	101	97	72
ほうれんそう	1,212	97.4	91.8	676	96.6	109.2	866	626	605
ねぎ	4,542	91.4	90.8	408	89.7	102.6	449	393	388
レタス類	8,187	105.6	99.5	173	68.0	91.7	211	155	155
きゅうり	4,326	95.5	82.9	456	87.9	114.8	441	430	505
なす	2,592	94.6	97.0	361	91.0	100.9	398	342	341
トマト	3,749	92.3	81.1	689	91.4	117.4	728	688	641
ピーマン	1,999	103.4	96.5	555	89.7	118.7	594	554	511
さといも	739	90.0	74.5	396	107.0	120.8	406	402	383
ばれいしょ	5,875	83.0	82.5	198	168.1	151.3	171	202	222
たまねぎ	7,003	77.7	75.0	205	194.6	194.9	201	211	205

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注1：平年比は過去5カ年（令和2～6年）平均との比較。
注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格は、青森産、北海道産の減少が早く、堅調な動きとなり、安めに推移した前年を3割以上上回り、平年を1割強上回った。(図2)。

葉茎菜類は、ねぎの価格が、肥大の回復に伴い、中旬以降に落ち着きを見せ、高めに推移した前年を1割強下回り、平年をわずかに上回った。(図3)。

果菜類は、トマトの価格が、中旬以降に徐々に落ち着いたものの、高値で推移した前年を1割近く下回り、平年を2割近く上回った(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が、絶対量不足により大玉を中心に高値となり、前年、平年とも9割以上上回った。(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

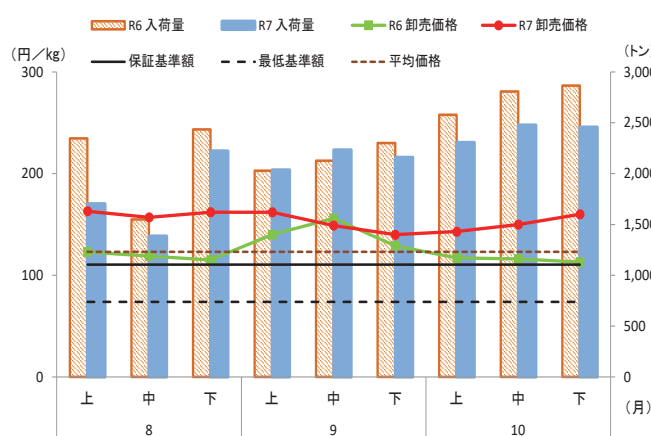


図3 ねぎの入荷量と卸売価格の推移

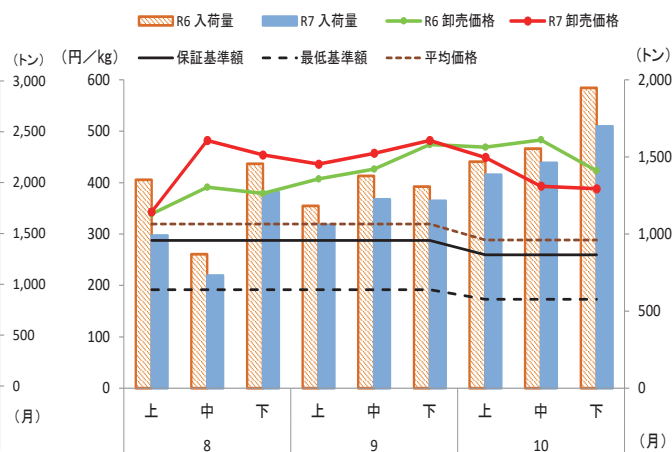


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

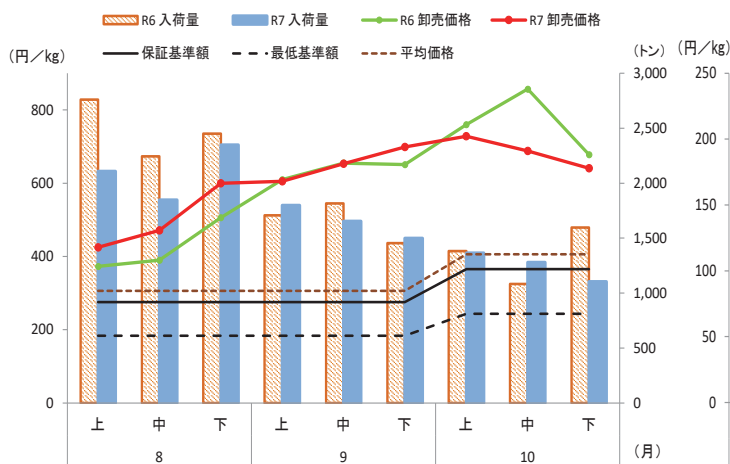
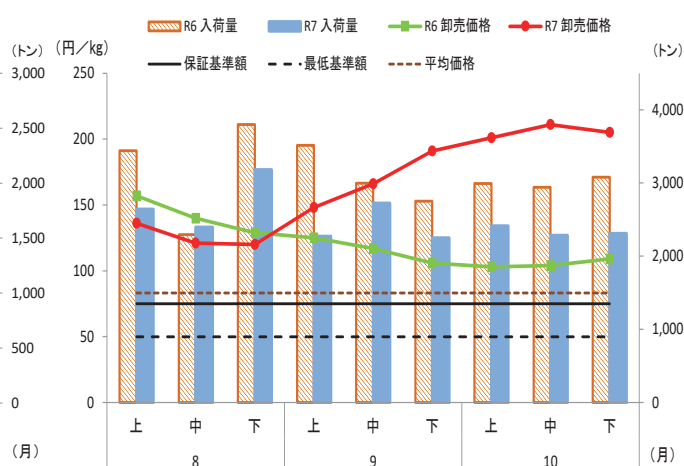


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、事業における過去6年分の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	10月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	青森産、北海道産、千葉産中心の入荷となった。青森産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥による生理障害の発生が多いが、回復傾向である。虫害の発生が散見される。北海道産の作付面積は前年並みで、干ばつの影響で停滞していた生育はほぼ回復するも、入荷不安定となった。千葉産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥による生育不良からはおおむね回復するも、一部に生育ばらつきその他、生理障害が散見される。総入荷はやや少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割近く下回った。 価格は、中旬以降に落ち着きを見せ、高めで推移した前年を1割ほど下回り、前年並みとなった。
	にんじん 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、一部地域で高温・干ばつの影響による生育不良が見られたが、生育はおおむね順調だった。ただし、切り上がりは早い。後続の千葉産は、8月上旬の播種時期に灌水ができなかった圃場は、高温・乾燥の影響により、発芽不良や欠株、生育不良が散見される。輸入の中国産は、前年を5割近く上回った。総入荷は、前年並みであった前年を1割以上下回った。 価格は、青森産、北海道産の減少が早く、堅調な動きとなり、安めに推移した前年を3割以上上回り、平年を1割強上回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響で玉伸びが悪く、傷みも多い。全体的に、生育は遅延傾向となった。後続の茨城産は、高温の影響で定植とその後の生育が遅延した。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年を1割下回った。 価格は茨城産の増量に伴い、中旬以降落ち着きを見せ、高めで推移した前年を2割強下回り、平年をわずかに上回った。
	キャベツ類 	群馬産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、若干遅延していた生育は回復した。高温の影響で一部軟腐病などの病害が散見されたものの、大きな影響はなく生育は順調だった。後続の千葉産、茨城産は高温・乾燥の影響で定植や生育が遅延した。やや活着不良も、9月上旬の降雨で回復傾向となった。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は、下旬に向け苦しい展開となり、大幅な高値だった前年を3割強下回り、平年をかなりの程度下回った。
	ほうれんそう 	群馬産、茨城産、栃木産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥により生育停滞が散見される他、病害が見られる。また、虫害の発生が多い。茨城産の作付面積は前年並みで、高温の影響で一部播種が遅延している。栃木産の作付面積は前年並みで、10月に入ってから気温低下により生育は鈍化している。また、虫害の発生が多い。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割近く下回った。 価格は、平坦地からの出荷が増加した中旬以降落ち着いたものの、その後の気温の低下で価格が下らず、高めで推移した前年をやや下回り、平年を1割近く上回った。
	ねぎ 	秋田産を中心に北海道産、青森産の入荷があった。秋田産の作付面積は前年並みで、7～8月の高温・乾燥に加えて、その後の豪雨などで生育停滞や病害の発生が見られたほか、虫害も平年より多い。北海道産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥による肥大不足からは回復した。青森産の作付面積は前年並みで、定期的な降雨により生育は回復傾向も、やや根の張りが弱い傾向にある。他の農作業と並行しているため入荷も不安定である。輸入の中国産は前年を1割以上上回った。総入荷量は前年、平年とも1割近く下回った。 価格は、肥大の回復に伴い、中旬以降に落ち着きを見せ、高めに推移した前年を1割強下回り、平年をわずかに上回った。
	レタス類 	茨城産、長野産中心の入荷となった。茨城産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥の影響により一部産地の生育が遅れている。長野産の作付面積は前年並みで、干ばつの影響からは回復し、生育はおおむね順調だが、活着不良による生育遅延や、玉伸びの悪い圃場が散見された。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。 価格は、大幅な高値で推移した前年を3割以上下回り、平年を1割近く下回った。
果菜類	きゅうり 	群馬産を中心に埼玉産などの入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、高温の影響により正品率が低下した。また、曇雨天による流れ果（実がならない状態）の発生が見られるほか、病虫害の発生が散見される。埼玉産の作付面積は前年並みで、高温の影響により奇形果、流れ果が散見されるほか、虫害も平年より多く、病害も散見され、樹勢も弱い。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、下旬に高騰し、大幅な高値で推移した前年を1割以上下回り、平年を1割以上上回った。
	なす 	高知産を中心に群馬産、栃木産などの入荷となった。高知産の作付面積は前年並みで、9月まで高温が続いたものの、定植後の生育はおおむね順調だった。虫害が散見されるが病害は少ない。群馬産の作付面積は、前年をやや上回り、高温・乾燥の影響でボケ果などの発生が見られる他、病虫害も散見されたがおおむね順調だった。栃木産の作付面積は前年をやや下回り、高温・乾燥の影響による花落ちが見られたほか、虫害が散見された。茨城産の作付面積は前年並みで、高温の影響による樹勢低下が見られたが、おおむね順調だった。総入荷量は前年、平年ともやや下回った。 価格は、中旬以降に落ち着きを見せ、高値で推移した前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに上回った。

	トマト 	千葉産、福島産、北海道産中心の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、一部の圃場で着果不良や障害果が散見されたが、おおむね順調だった。病害も散見されるが前年より少ない。福島産の作付面積は前年並みで、高温の影響により裂果、障害果が散見された。病害も散見された。北海道産の作付面積は前年並みで、高温による空洞果、裂果、軟化玉が散見された。東北産、北海道産は、少なかった前年より残量があった。総入荷量は、後続産地が追いつかず、少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、中旬以降に徐々に落ちていたものの、高値で推移した前年を1割近く下回り、平年を2割近く上回った。
	ピーマン 	茨城産を中心に、岩手産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、一部高温障害による生育遅延が見られたが、おおむね順調だった。岩手産の作付面積は前年並みで、8月までの高温・乾燥の影響により樹勢の低下が散見され、ひび果や赤変が発生した。虫害も散見された。後続の高知産は9月の気温が高かったことから、一部流れ果が散見された。また、虫害の発生が散見された。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をやや下回った。 価格は、下旬に向けて落ち着きを見せ、高値で推移した前年を1割強下回り、平年を2割近く上回った。
土物類	さといも 	埼玉産中心の入荷となった。埼玉産の作付面積は前年並みで、収穫が始まっており、生育にばらつきはあったものの、灌水の十分な圃場についてはおおむね順調だった。輸入の中国産は前年を1割以上上回った。総入荷量は少なかった前年を1割下回り、平年を2割以上下回った。 価格は、大きな増量がなく下旬にやや落ち着いたものの、高めで推移した前年をかなりの程度上回り、平年を2割ほど上回った。
	ばれいしょ 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、8月の降雨により変質や規格外品が多発している。地域差はあるものの、小玉傾向で発芽などの品質不良が散見される。総入荷量は前年、平年とも2割近く下回った。 価格は、中旬以降に上がり、やや安値で推移した前年を7割近く上回り、平年を5割以上上回った。
	たまねぎ 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了した。高温・干ばつの影響により小玉傾向であった。輸入の中国産は前年の2倍以上となっており、米国産が大幅に増加している。総入荷量は、前年、平年とも2割以上下回った。 価格は、絶対量不足により大玉を中心に高値となり、前年、平年とも9割以上上回った。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、
入荷量は3万9015トン、前年同月比94.9%、

価格は1キログラム当たり270円、同99.6%
となった(表3)。
品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(10月速報)

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	39,015	94.9	90.1	270	99.6	115.5	287	267	258
だいこん	3,394	104.0	87.4	119	89.3	102.1	139	113	107
にんじん	2,565	79.3	80.3	150	145.2	111.0	141	151	158
はくさい	7,063	109.8	101.2	82	77.2	98.3	111	76	65
キャベツ類	5,138	92.8	87.5	89	71.1	92.2	98	93	77
ほうれんそう	384	105.4	89.1	866	97.6	114.6	989	800	822
ねぎ	1,061	98.5	95.0	499	85.2	99.0	541	485	481
レタス類	1,636	124.3	99.8	187	64.4	95.0	220	161	179
きゅうり	1,021	98.2	88.6	427	84.7	110.8	431	395	460
なす	802	104.9	106.9	367	90.9	105.4	424	343	348
トマト	1,458	96.7	102.8	661	88.3	108.7	728	667	583
ピーマン	603	109.5	115.7	564	89.1	114.6	606	588	507
さといも	117	93.4	63.6	447	100.6	137.1	451	452	439
ばれいしょ	2,426	75.1	82.9	216	198.5	182.5	194	217	232
たまねぎ	3,868	77.8	75.9	206	180.2	187.7	198	210	211

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注1：平年比は過去5カ年(令和2～6年)平均との比較。
注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

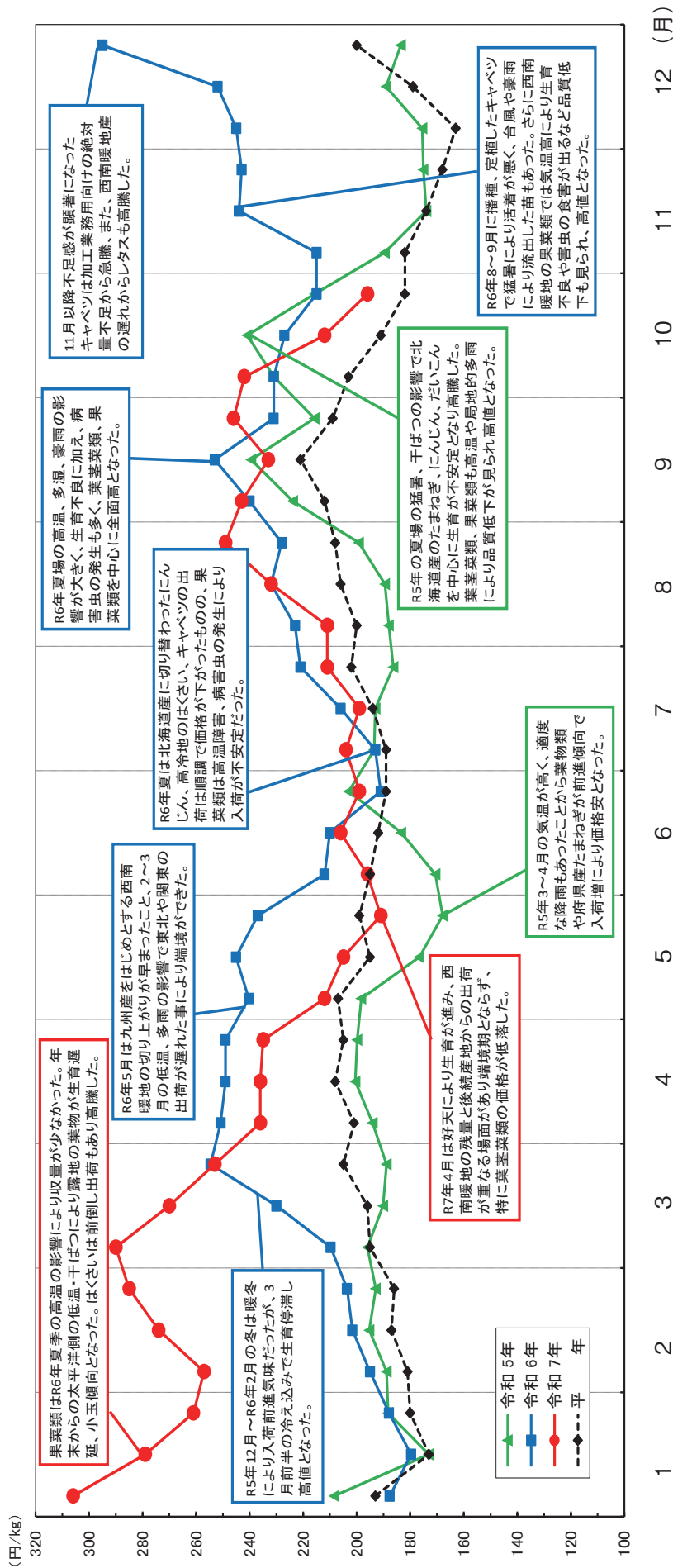
表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	10月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	北海道産が中心となり、主力の青森産、岐阜産、新潟産などの入荷があった。北海道産と岐阜産は順調な出荷が続いたが、新潟産、千葉産は作柄不良で入荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は、単価高だった前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに上回った。
	にんじん 	北海道産が中心の入荷であった。作柄不良で産地出荷量の少ない状況が続き、下旬には切り上げ始め入荷減となった。業務関係では国産の不足から輸入の中国産の利用が増え、中国産は前年の5倍以上の入荷量となった。月間全体の入荷量は、前年、平年とも2割近く下回った。 価格は、長く続いている品薄感から高値のまま推移し、北海道産の切り上げり始めるとさらに上昇した。月間では前年を4割以上上回り、平年をかなり大きく上回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産が中心となる入荷であり、下旬には茨城産もスタートした。上旬は干ばつの影響から産地出荷量が伸びず、中旬以降にピークを迎えた。月間全体の入荷量は、前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに上回った。 価格は、中旬以降の入荷増量に伴い急落し、下旬にはさらに下落した。月間では前年を2割以上下回り、平年をわずかに下回った。
	キャベツ類 	群馬産が中心となり、主力の長野産や後続の愛知産、茨城産の入荷もあった。上旬は干ばつの影響で玉肥りが悪く、小玉傾向だったことから産地出荷量は伸び悩んだ。中旬は愛知産や茨城産が開始し、下旬は群馬産の京阪神向けの出荷が増えたことにより、中旬以降は入荷増量となったが、月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は、入荷増量に伴って旬を追うごとに下落し、月間では前年を3割近く下回り、平年をかなりの程度下回った。
	ほうれんそう 	岐阜産が中心となる入荷であった。上・中旬は順調な出荷が続いたが、下旬は急な気温低下により生育不良が発生し、産地出荷量が激減した。後続の福岡産などもスタートしたが、入荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、極端に少なかった前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は、絶対量不足から単価高で推移した。単価高だった前年をわずかに下回り、平年をかなり大きく上回った。
	ねぎ（白ねぎ） 	長野産と北海道産が主体となる入荷で、鳥取産や群馬産の入荷もあった。北海道産は作柄が悪く、全旬を通じて産地出荷量が少ない状況が続いた。長野産も干ばつの影響などで出荷量は伸び悩み、月間全体では、少なかった前年を下回った。 価格は、高値が続いた前年を下回った。
	ねぎ（青ねぎ） 	青ねぎは香川産と徳島産が主体となる入荷で、細ねぎは高知産と静岡産が主体となる入荷であった。各地とも生育良好で、潤沢な出荷が続いた。香川産の月間の入荷量は前年を大幅に上回り、徳島産も前年を上回った。月間全体では前年をやや上回った。 価格は、旬を追うごとに下落し、月間全体では単価高だった前年を大きく下回った。
	レタス類 	玉レタスは長野産の入荷が主体となり、後続産地の茨城産や兵庫産も中旬以降に開始した。長野産は潤沢な入荷が続き、旬を追うごとに入荷減量となったが月間全体では前年をかなり上回った。茨城産も順調なスタートとなり、前年を大幅に上回ったが、兵庫産や九州産は生育遅れにより伸び悩んだ。サニーレタスは長野産が主体となり、中旬以降は後続の茨城産や主力の福岡産などが開始した。夏場の高温の影響により福岡産の生育が悪く、出荷が遅れ、前年の3割程度の入荷しかなかった。茨城産は順調に開始したが、長野産は切り上げりが早く、入荷量全体としては前年を下回った。リーフレタスも長野産が主体となり、後続の福岡産の入荷も始まった。長野産は残量が多く順調な入荷が続いたが、福岡産は夏場の高温の影響で生育が悪く、産地出荷量は少ない状況が続いた。月間入荷量は前年をかなり下回った。レタス類全体では前年を2割以上上回り、平年並みであった。 玉レタスの価格は、単価高だった前年を大幅に下回った。サニーレタスとリーフレタスも、単価高だった前年を大幅に下回った。レタス類全体では、前年を3割以上下回り、平年をやや下回った。

果菜類	きゅうり 	大阪産と群馬産が主体となり、後続の宮崎産の入荷や福島産の残量入荷などがあつた。福島産は、前月までの前進出荷の影響により、上旬で切り上がったことに加え、秋冬の産地の遅れから全体の入荷量は伸び悩んだ。月間全体では少なかった前年をわずかに下回り、平年をかなり大きく下回った。 入荷量が安定せず積極的な商談が進まず荷動きが悪かったため、上旬から中旬は価格も低迷したが、後続産地の遅れから下旬に上昇した。月間全体の価格は、高値だった前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度上回った。
	なす 	千両系は高知産が中心となり、京都産の残量入荷などがあつた。長なすは愛媛産が終盤となり、後続の福岡産と熊本産が主体となる入荷であつた。秋冬産地が中旬にピークを迎えて入荷増となったが、夏秋産地の入荷は伸び悩んだ。月間全体では、前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は、高値だった前年をかなりの程度下回り、平年をやや上回った。
	トマト 	岐阜産が中心となり、岡山産や愛媛産などの入荷があり、後続の愛知産も始まった。夏秋産地は産地残量が多く、上・中旬は産地出荷量が多い状況が続いたが、下旬には減量傾向となった。後続の秋冬産地は出荷遅れから入荷量が伸び悩んだ。月間全体では前年をやや下回り、平年をわずかに上回った。 価格は、単価の高い秋冬産地の遅れから、夏秋産地が終盤に向かって旬を追うごとに下落傾向となった。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度上回った。
	ピーマン 	宮崎産を中心に、高知産などの入荷があつた。夏秋産地は産地残量が少なく、入荷量は伸び悩んだ。秋冬産地も出荷遅れから上・中旬の入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。 価格は、高値だった前年をかなりの程度下回り、平年をかなりの程度上回った。
土物類	さといも 	愛媛産が中心の入荷であつた。月の前半は月見需要があり、給食関係の一定の需要があり入荷量が多かった。下旬には引き合いが弱まったが、生協の需要もあり極端な減量とはならなかった。業務関係では輸入の中国産の利用が多く、前年を大きく上回った。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年を4割近く下回った。 価格は前年並みで、平年を4割近く上回った。
	ばれいしょ 	丸芋は北海道産の入荷であつた。作柄不良により産地出荷量が極端に少ない中、一定の引き合いがあつたことから単価が高かった。旬を追うごとに入荷増量となったが、月間では前年を大きく下回った。メークインも北海道産の入荷で、作柄不良により収穫量は極端に少なく、産地出荷量も少ない状況が続いた。高値から引き合いも強まらず、月間の入荷量は前年の3分の1程度であつた。ばれいしょ全体の入荷量は前年を2割以上下回り、平年を大幅に下回った。 丸芋の価格は、引き合いが強まる中で旬を追うごとに上昇を続け、月間全体では前年の1.7倍となった。メークインの価格も高騰し、月間全体では前年の2.5倍となった。ばれいしょ全体の価格は、前年の2倍近くとなり、平年を8割以上上回った。
	たまねぎ 	北海道産が中心となり、兵庫産の入荷もあつた。北海道産は天候不順から収穫量が極端に少なく、産地出荷も全旬を通して前年の半分以下の状況が続いた。兵庫産は前年よりは産地残量が多く、北海道産を補てんする形での入荷となったため、全旬とも前年を大きく上回った。月間全体では、前年、平年とも2割以上下回った。 価格は、絶対量不足から高騰を続け、旬を追うごとに上昇した。月間全体では前年を8割以上上回り、平年を9割近く上回った。

(執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)

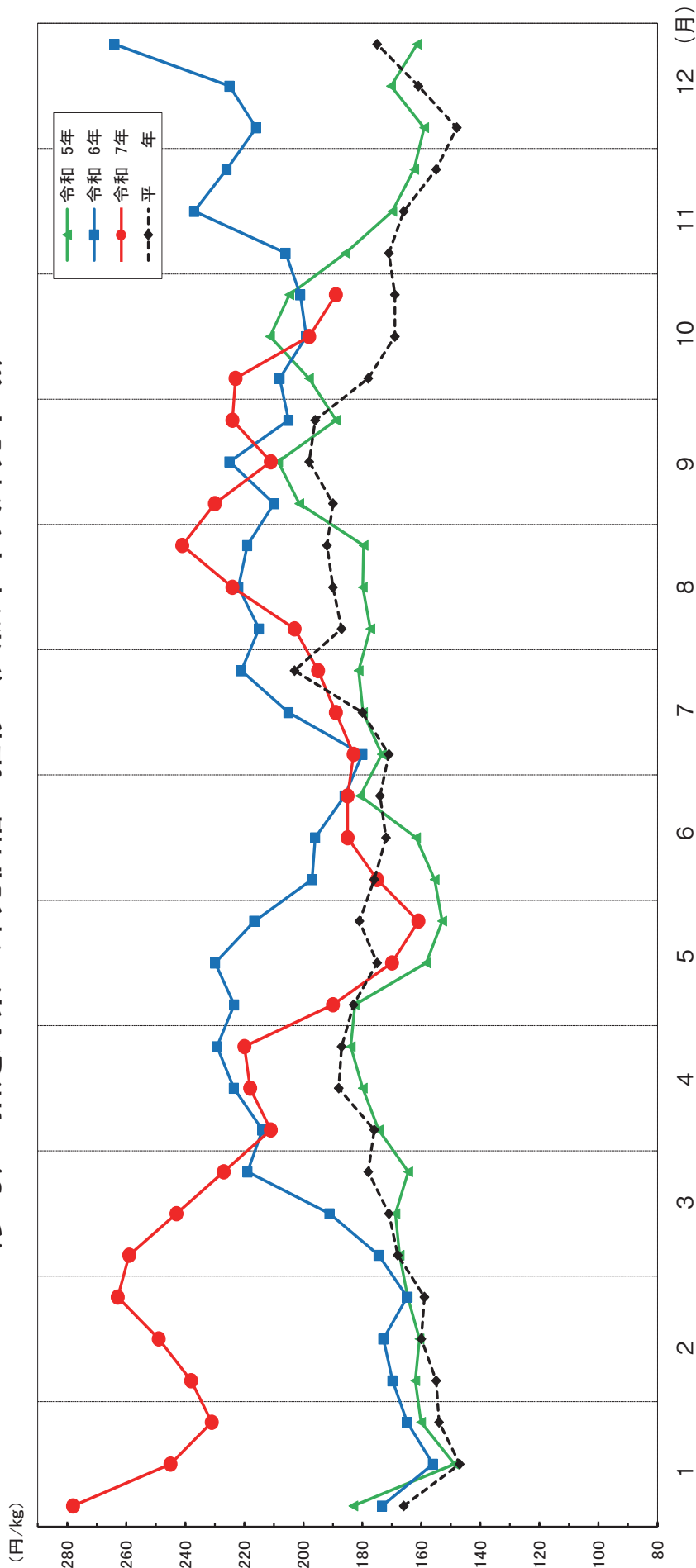


(単位：円/kg)

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬			
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295
令和7年	306	279	261	257	274	285	290	270	253	236	236	235	212	205	191	196	206	199	204	199	211	211	232	249	243	233	246	242	212	196						
平 年	193	173	180	181	187	186	195	196	205	201	208	205	207	195	199	195	192	189	189	194	202	200	206	208	212	221	209	203	191	182	182	174	168	163	179	200

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注1：平年とは、過去5力年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。
注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、定橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月	
	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬	上旬	中旬
令和 5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180
令和 6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219
令和 7年	278	245	231	238	249	263	259	243	227	211	218	220	190	170	161	175	185	183	189	195	203	224	241	230
平	166	147	154	155	160	159	168	171	178	176	188	187	183	175	181	176	172	174	171	180	203	187	190	192

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。